

銭形平次捕物控

たぬき囃子

野村胡堂



「親分、あつしは、気になつてならねえことがあるんだが」

「何だい、八、先刻さつきから見えていりや、すっかり考え込んで火鉢へ雲脂ふけをくべているようだが、俺はその方がよっぽど気になるぜ」

捕物の名人銭形の平次は、その子分で、少々クサビは足りないが、岡つ引には勿体もったいないほど人のいい八五郎の話を、こうからかい、気味に聞いてやつておりました。

遅々たる春の日、妙に生暖かさが睡ねむりを誘つて、陽ひが西に廻ると、義理にも我慢の出来なくなるような薄霞うすがすんだ空そら合あひでした。

「ね、親分、あつしは、あの話を、親分が知らずにいなさるはずはねえと思うんだが——」

「何だい一体、その話でえのは？ 横町の乾物屋のお時坊が嫁に行つて、ガラツ八がが、つかり、しているつて話ならとうに探案が届いているが、あの娘

の事なら、器用にあきらめた方がいいよ、町内の良い娘いが一人ずつ片付いて行くのを心配しんぱいしていた日にや、命が続かねえぜ」

「冗、冗談でしょう、親分、誰がそんな馬鹿なことを言いました」

「誰も言わなくなつて、銭形の平次だ、それくらいのことには目が届かなくちや、十手捕縄を預かつていられるかい」

「そんな馬鹿なことじゃねえんで——あつし、が気にしているのは、親分も薄々聞いていなさるでしょうが、近頃大騒ぎになつている本所の泥棒——、三日に一度、五日に一度、選よりに選つて大家たいけの雨戸を切り破る手口は、どう見ても人間業わぢじゃねえ。石原の親分じゃ心もとないから、いずれば、銭形の親分に出て貰つて、何とかしなきゃア納まりが付くめえ——つて、先刻も銭湯で言つていましたが、あつし、もそりやアその通りだ、うちの親分なら——」

「馬鹿野郎ツ」

みなまで言わせず、平次はとぐるをほぐして日向ひなたへ起き直りました。

「へえ——」

「へえ——じゃないよ、世間様の言うのは勝手だが、手前^{てめえ}までそんな事を言やがると承知しねえよ」

「相済みません」

「本所は石原の兄哥^{あにき}の縄張だ、頼まれたって俺の出る幕じゃねえ。それに、石原の兄哥にケチなんぞ付けやがって」

「——へエ、面目次第もございませぬ」

「馬鹿だなお前は、なんて恰好だい、借金の言い訳じゃあるまいし、そう二つも三つも、立て続けにお辞儀をしなかつたつてよかろう。それに、膝^{ひざ}つ小僧なんか出してさ。一体お前なんか、そんな身幅の狭い^{あわせ}裕^{あわせ}を着る柄じゃないよ——ウ、フ」

平次もとうとう吹出してしまいました。こうなると、何の小言を言っていたか、自分でも判らなくなつてしまいます。

「御免下さい」

折から、入口の格子の外で、若い女の声。

「八、ちよいと行つて見ておくれ、どうせお静の客^{あいにく}だろうが、生憎^{あいにく}買物に出たようだ」

「へエ——」

ガラツ八の八五郎は、それでも素直に立上がつて今叱られたばかりの狭い袷の前を引つ張りながら縁側から入口を覗きましたが、何を見たか、弾き返されたように戻つて来て、

「親分、た、大変」

日本一の酸^すつばい顔をします。

「何だ、騒々しい」

「石原のが来ましたぜ」

「利助兄哥か」

「いえ、娘のお品^{しな}さんの方で——」

「何だ、早くそう言えばいいのに、丁寧にこつちへお通しするんだ。それから、お茶を入れる支度をしてくれ、——いつまでもそんなところに突つ立つてる奴があるかよ、坐つて取次ぐんだぜ、膝^{ひざ}つ小僧に気を付けな、お品さんに笑われるじゃないか」

平次は小言を言いながらも、この面喰らつた正直者を、庇^{かば}うような眼差しで見送りました。

お品というのは、石原の利助——平次と事ごとに張合った、本所の御用聞——の一人娘で、この時二十三三だつたでしょう。二三年前一度縁付いて、夫に死なれて父親の許へ帰つて来ましたが、若後家というよりは、いかにも娘々した、水の滴りしたたりそうな美しい女振りでした。

襟えりの掛つた黄八丈きはちじょう、妙に地味な繻子しゆすの帯を狭く締め、髪形もひどく世帯染みてますが、美しさはかえつて一入ひとしおで、土産物みやげものの小風呂敷こ風呂敷を、後ろの方へ慎重ごうまんに隠して、平次の前へ心持俯向こころもちうつむいた姿は、傲慢ごうまんで利かん気で、苦虫を噛み潰つぶしたような顔を看板かんばんにしている親の利助とは、似も付かぬ優しさのある娘です。

「お品さんが来てくれるとは珍しいネ、お静は折悪しく買物に出かけたが、どうせすぐ帰るだろう、ゆつくり話していつて構わないだろうネ」

小さい時から知っている平次は、ツイこういつ

た、わけ隔てのない心持で、渋い茶などを入れてやりました。

「有難うございます。そうもしてはいられません
が、——実は折入つてお願いがあつて伺いました」
娘はモジモジして、何やら言い兼ねている様子です。

「お品さんが、私に？　へエ——どんな話かは知らないが、私に出来ることなら何などとして上げよう——何、人が居ちや言にくい話？　大丈夫、お品

さんも知つている八五郎が一人居るだけで、あとは皆んな出払つている。八なんざ馬みたいなもので、何を聞かしたつて構やしない——あッ、そこに居たのか、ハツハツハツハツ、こいつは大笑いだ」

平次の高笑いに吹飛ばされたように、ガラッ八は納まりの悪い顔を、次の間へ引込めてしまいました。

「実は親分、お聞きでしょうが、あの本所の押込み騒ぎ——、昨夜は六軒目で、番場町の両替渡世井筒屋清兵衛がやられました」

「そうだつてね、利助兄哥もさぞ心配だろう」

「それが親分、困ったことになってしまいました。なにぶん入られたのは六軒とも大きい家ばかりで、盗られた金も少くない上、昨夜はどうとう人まで害めるようなことになったのでございます」

「ほう、それは大変」

「井筒屋の旦那が、折悪しく目を覚まして、縁側まで出たところを、脇差で袈裟掛に斬られたのだそうでございます」

「フム」

「そうでなくてさえ、石原のも年を取ったとか何とか、世間ではうるさく言いますし、お上の方でもこの間から、何かとやかましくおつしやいます。石原の利助が、五十近くなって、十手捕縄を召上げられるような事があつては、世間へ合せる顔もないと言つて、夜の目も寝ずに飛廻りましたが、今度ばかりは何としても手掛りがありません。あの負けん気の父が、すっかり気を腐らして、三日前からとうとう寝込んでしまうような始末でございます」

「それは気の毒な」

「今日も、平常お世話になつてゐる、井筒屋の旦那

が殺されたというのに、行つてみることも出来ません。子分衆に任せて、一人で気を揉んでおりますが、御存じの通り、身内にもあまり役に立つのもありませんので、はたで見てゐる私の方が気が詰まるようでございます」

「お品は涙ぐましい眼を落して、しばらく声を呑みました。」

「それは、さぞお困りだろう、私に出来ることなら、して上げたいが——」

「親分、私は親に隠れて、お願いに伺いました。このまま放つておけば、石原の利助の一代の名折れ、十手捕縄を召上げられないものとも限りません」

「……………」

「日頃は親分との間に、面白くない事もあるように聞かないではありませんが、親分は江戸中で評判の腕利き、それに、人の難儀を黙つて見ていらつしやる性分でないことも存じております。どうぞ、親子を助けると思召して、一と肌脱いで下さいますでしょうか、親分、お願いでございます」

「お品はいつの間によら、畳の上へ、水仕事で少し

荒れているが、娘らしく光沢のある、美しい手を落して、そつと袖口を脛まふたに当てました。

若々しいと言つても、御用聞の娘に育つて、一度は縁付いたこともあるお品は、こう話をさせると、筋も通り情理も立つて、隣の部屋で黙つて聞いているガラツ八などよりは、余程性根の確しつりしたところがあります。

「お品さん、よく判つた。実は兄哥にすまないから、遠慮していただけの事で、そんな事に骨惜しみをする俺ではない、何とか角の立たないように、蔭から目鼻を開けて見よう——そう言う、この平次はひどく器量がいいようだが、決してそんな自惚うぬぼの沙汰じゃない。人が変ると見様みやうも變つて、とんだ手柄をすることがあるものだ」

「有難うございます、親分」

「まだ礼を言うには早いよ。ところで、縄張違いの私では飛込んで行つても何かと困ることがあるだろう、お品さんにも少しは手伝つて貰えるだろうネ」

「それはもう」

「女御用聞もしやれているだろう、ハツハツハツ、

これは冗談だ」

平次は蟠わたかまりない調子でこう言う、お品もツイ誘われたように、濡れた顔を挙げて、淋しくニツコリしました。

その時ちようど、お静も帰つて来た様子。

「それじゃ、あまり遅くならないうちに、一と走り番場町の井筒屋まで行つてみてくるとしよう。お品さんは大した用事もあるまいから、お静を相手に、ゆつくり遊んで行きなさるがいい」

平次はガラツ八を促し立てながら、お静と入れ違いに、怪盗の跡を尋ねて、本所へ馳はせ向いました。

三

「銭形の親分、有難うございました。親分がお出で下されば曲者くせものは捕まったも同じこと——」

井筒屋の番頭の言葉は、追従つじようとばかりは聞えませぬ。土地でともかく、怖い者に思われている石原の利助さえ来てくれないのですから、主人の命と、二

三百両の有金をやられた井筒屋にしては、その頃評判の御用聞、銭形の平次の顔を見るのは、全く救いの神のようなものだったのです。

「検屍は済んだのかい、番頭さん」

と平次。

「へエ、昼前に済んで、主人の死体も始末いたしました。人間業らしくない泥棒が、本所中の大家を荒し廻るとは聞きましたが、まさか、人を害めるとは思いませんでした」

「とんだ災難だったネ」

「へエ、有難うございます。こんな事と知つたら、場所柄で、関取衆でもお願いしておくのでございました」

平次は番頭の愚痴に追つ掛けられながら、何かと見て廻りました。家族はかなり多勢ですが、打ちのめされたように、悲嘆の床の中に居る女房、まだ小さい子供達、奉公人、いずれも疑わしい者は一人もなく、泥棒は明らかにこの間から噂に上っている本所荒らしで、もう六軒も押入つてることですから、家の中では、何にも探しようがあるとは思われま

せん。

「済まないが番頭さん、雨戸をすつかり締めて、昨夜泥棒が入った時と同じようにして貰えまいか」

「へエへエそれは、わけもないことで」

井筒屋の雨戸をすつかり締め切ると、平次は一応外へ出て縁側をひと廻りしました。泥棒の入ったのは、南の縁側、僅かばかりの隙から鋸を入れて、かなり大きい穴を二つまで開けた上、輪鍵も棧も易々と外したことはよくわかります。

平次は有合せの鋸を借りて、

「八、手前これで外から雨戸を引いてみな、泥棒になつたつもりで、出来るだけ静かにやるんだよ」と平次。

「そんな事はやりつけないから、うまく行かないかも知れませんが、親分」

「馬鹿野郎、そんな事をちよいちよいやられてたまるものか」

平次は冗談を言いながら、家の中へ入って、主人の寝部屋に陣取りました。

「ようがすか、親分」

「黙つてゴシゴシやりな、いちいち断る泥棒なんてものはないよ」

「……………」

ガラツ八は、泥棒の鋸引きにした雨戸へ、廻し鋸を入れて少しづつ、少しづつ引いております。

白昼、四方は相当やかましい時ですが、それでも、鋸の音は手に取るよう、両替屋の主人や番頭——日頃窃盗や押込に敏感になっている者が、どんなによく睡ねむつていたにしても、これだけの細工を知らずにいるはずはありません。

「泥棒の入つたのは暁方あけがただと言つたね、番頭さん」と平次。

「へエ——かれこれ、寅刻ななつ(四時)過ぎでございましてか、旦那様の声に驚いて、駆け付けた時は、雨戸は一枚開けつ放しになって、薄明りが外から射しております」

「月はなかつたはずだね、昨夜は？」

「四月の七日でございませう。お月様は夜半にはなく なります」

平次は、薄暗い中で、そのまま腕を拱こまぬきました。

「八」

「へエ」

「もうたくさんだよ」

「そう言わずにもう少し、あとちよつとで柵かまちに届きますよ」

「馬鹿だな、そんな事したら雨戸は台なしだ、泥棒ごっこはもうたくさんだよ」

「そうですかね、こんなお手伝いならいつでもやりますよ」

「呆あきれた奴だね」

四

「ところで番頭さん、あれだけの鋸引きが、聞えなかつたのはどういうわけだろう。あんな大穴を二つもあけるには、どうしたつて半刻はんとき(一時間)はかかるが」

平次には腑ふに落ちないことばかりです。

「それがネ親分、昨夜は狸たぬき囃ばやし子がひどくて、どうし

ても寝付かれなくて弱つたくらいですから、暁方あけがたになつてぐつすり、寝込んだのでございましょう。あんな大穴を開けるのを、目敏めざといのが自慢の私が知らないはずはありません」

番頭は妙な事を言い出します。

「狸囃子——？」

「え、本所七不思議の一つの狸囃子でございますよ。こんな場所ですから、狐や狸のいるに不思議はありませんが、近頃はそれも毎晩のようで、うっかりすると寝そびれて、暁方になつてウトウトするところがございます」

「それは変つた話を聞くものだ、本所の狸囃子といふのは話の種にはなつていますが、真ほん当とうにそんなものがあるとは思わなかつたよ」

「知らない方は皆んなそうおっしゃいますが、一度本物を聞くと、不気味でなかなか寝付かれるものではございませぬ」

「やはり狸が腹鼓でも打つとといったことかネ」と平次。

「そんな手軽なもんじゃございませぬ。太鼓と笛

で、馬鹿囃子そつくりですが、それが、遠いような近いような、陰いんに籠こもつたような、口ではちよいと申し上げにくいような不思議なものでございませぬ」

番頭はすっかり怯おびえているものと見えて、この話になると妙に眼すまが据すわつて真剣になります。

「笛まで入るのは念入りだネ、どこの森でやっていると、どこかの木立でやっていると、おおよその見当ぐらひは付くだろう」

「それが親分、不思議なんで、ずいぶん腕うでに覚えのある方が、狸退治をやるんだと言つて、囃子の音に見当を付けて、出かけてみるんだそうでございませぬが、東かと思つて出かけると、西の方から聞え、南の方のつもりで探していると、北に移るんだそうでございませぬ」

「へエ、それは面白いな」

「ちつとも面白くはございませぬ。私どもが聞いたんでも、吾妻橋あづまばしの佐竹様のお屋敷あたまの辺りかと思つと、松倉まつくらの方かたにvari、原庭はらにわの松巖寺しょういんじの空地かと思つと、急に荒井町の方角かたむけに變つたりいたします。狸囃子ねじらしというものは一体いっしょこうしたものだそう、大

概の方は狸退治どころか、ヘトヘトになつて帰つて
 しまいます」

「いよいよ面白いな、泥棒が狸だとすると、フン掬
 まえると狸汁が出来るだろう。ガラツ八、一杯飲め
 そうだぜ」

平次はすっかり悦に入つて、呆氣にとられてゐる
 ガラツ八を顧みました。

「親分、狸が雨戸を破つたり、人を斬つたりするで
 しょうか」

「そこだよ、俺にも解らなくつて弱つてゐるのは」
 平次はこんな気楽な事を言いながら、一度締め
 切つた雨戸を開けさせて、今度は、斬られた主人清
 兵衛の死体を、一応見せて貰いました。

右の肩から胸へかけて、たつた一と太刀、袈裟掛
 に斬つた手口は、恐ろしい腕前で、とても狸や狐の
 仕業とは思われません。

「親分、こいつは狸にしちや器用すぎますぜ」
 とガラツ八。

「馬鹿、世の中には、どんな狸がいるか、手前なん
 かに解つてたまるものか」

「そうですかねえ、親分」

「ところで番頭さん、その狸囃子は、何刻ほど続く
 んだネ」

「宵から始まつて、夜中まで、いやどうかしたら、
 暁方まで続くでしょう。遠くなつたり近くなつた
 り、あれが始まつた晩は、とても睡られるこつちや
 ございません」

「根氣のいい狸だネ」

平次はそれつきり黙つてしまいました。狸に興味
 を失つたのでしよう。

「八、この泥棒狸の手口は、もう少し見なきや了解
 らないようだ。この間から入られた家を、一軒残ら
 ず歩くとしよう」

「ヘエ——大変ですネ、そいつは」

「骨惜しみしちや、いい御用聞にはなれないよ。ま
 ず黙つて伴いて来な、帰りは石原の利助兄哥のここ
 ろを覗いて見舞でも言つて行こう」

五

平次とガラツ八は、それから日取りを逆に取つて、泥棒に入られた家を六軒、すっかり見てしましました。

井筒屋の前に入られたのは、原庭の物持ち後家で、お紺という四十年配の金貸し、これは幸い怪我はありませんが、用筆筒ごと庭に持出されて、有金三十両ばかり盗られたのを、夢にも知らなかつたという話、手口は井筒屋と同じこと、雨戸を切り開いた鋸目から、宵のうちから、狸囃子が聞えたことまで、そつくりその通りです。家族はお紺の外に用心棒とも手代ともなく使っている嘉七という三十男と、下女が一人。

その前に入られたのは、中の郷の長源寺という寺、これも手口は同じことですが、奪られたのはほんの二三両、住職がつましいので、金があるという評判に釣られた泥棒の失敗とわかりました。庫裡の雨戸の鋸目から、狸囃子が宵から聞えたことまで型

の通りです。

その前は旗本、瀬川壹岐、松倉町の大きい屋敷ですが、身分に恥じて届出もしなかつたということ、平次も入つて見るわけには行きませんが、手口にも狸囃子にも変りがなかつたことは、近所の人が証明しております。

その前は表町の酒屋、和泉屋徳次郎、これも、型の通り、とところで、一番最初に入られたのは、中の郷で、裕福に暮している石上左伝次という浪人者、二三年前まではさる大藩に仕えましたが病身なのと、殿様が無法なので自分から退転したという五十年配の人物です。家族は内儀と娘が一人、雇人は昔の草履取りであつたという四十男が一人。

こう調べ上げて石原の利助のところへ寄つたのは、もう夜でした。

「兄哥、加減が悪いそうだな、どんな塩梅だ」

「お、銭形のか、遠いところを、わざわざ気の毒だったな、なアに大した事じゃねえが、風邪を引いたのに、疲れが出たんだらう、明日あたりから、仕事の方に取るかかろうかと思つている」

利助は襦袢じゆばんを引つけて、長火鉢の前へ出て来ましたが、何となく勝すぐれない顔をしております。

「まあ、大事にするがいい、無理をしちや後へ悪わるかろう」

「お品の奴が心配して、医者を呼べの、お詣まいりをするのと言うが、この年まで、薬というものを嫌いで通した利助だ、今さらそんな事をしたって、何の足しになるものじゃねえ」

顔色は悪いが、相変らずの利かん気で、平次もすつかり、今日の始末を打明けそびれてしまいました。

そのうちに、お品は、晩の用意をして一本つけて参ります。

「何にもごぎいませんが、有合せで」

といったような取りなし、これは馴れ合いづくですから、平次も遠慮するようなしなような、ズルズルベツタリ盃さかづきを嘗なめてっていると、やがて戌刻いっつ(八時)という頃。

「おや、ありや何だい——」

遠くの方から節面白く、太鼓と笛の音ねが聞こえて

来たのです。

「あ、また始まりやがった」

石原の利助はあまり気にする様子もありません。

「何だいありや、兄哥」

「狸囃子さ、馬鹿馬鹿しい」

「押込の入った晩には、必ず狸囃子が宵から聞えるつていうが、あの音なんだネ」

「世間じゃそんな事を言うが、まさか狸が泥棒と共謀ぐもになつてゐるわけじゃあるめえ」

「いや、そうでもないよ兄哥、俺は一つ、明日は狸狩りをやろうと思ふんだが、若い者を少し貸して貰えるだろうネ」

「構わないとも、どうせ遊んでゐるようなものだ。

あの泥棒ときた日には、若い者なんかの手に負える代物しろものじゃねえ」

平次は間もなく暇いとまご乞いをして出ました。が、門口へお品を呼んで、何やら耳打ちするとそのままガラツ八をつれて、神田の家とは方角違いの、原庭の方へ道を急ぎます。

「親分、どこへ行きなさるんで」

とガラツ八。

「黙つてついて来るがいい、狸のお宿を探すんだ」

「へエ——」

ガラツ八は渋々ながら、平次の後から、影のよう
にピタリとひつ付いて、やって行きました。

井筒屋の番頭が言ったように、馬鹿囃子はしばらく
原庭の方から響いておりましたが、平次が原庭へ
行つた頃は、いつの間にやら方角が變つて、それが
松倉の方になっております。

「親分、あまりいい気味じゃないネ」

とガラツ八。

「何をつまらない、狸の方でガラツ八さんが怖いっ
て言つてるぜ、黙つてついて来な」

平次は昼一度歩いた通り、原庭の金貸し後家のお
紺の家から逆に取つて、中の郷の石上左伝次の家ま
で五軒をいちいち調べて廻りましたが、さて何の掴
みどころもありません。相変らず狸囃子は、どこか
らともなく、人を馬鹿にしたような長閑さで聞こえ
ております。

「今晚もまた、どこかへ入られるだろうが、困つた

ことに防ぎようがない、ガラツ八、帰ろうよ」

「へエ——」

二人はいつの間にもやら大川端おおかわばたに出ておりました。
「明日は一つ狸退治だ。畜生ッ、その時こそ逃しは
しねえぞ」

六

翌あぐの日の狸狩りは、本所中の物笑いの種になりま
した。

銭形の平次は、子分のガラツ八を伴つれて神田から
わざわざやつて来ると、利助の子分を十人ばかり駆
り集めて、西は大川、東は業平橋なりひらばし、南は北割下水、
北は枕橋の間を、富士の巻狩りほどの騒ぎで狩り出
したものです。

平次は脚絆きゃはんに草鞋わらしといった装束で、手槍かつを担かぎ、
子分達はさすがにそれほど大袈裟おおげさには用意しません
が、それでもいい若い者が、百姓一揆いっけんみたいに、竹
槍ひつぎまで提ひげて押し廻まわしたのですから、本所中はお祭

のような騒ぎ。

朝から始まつて夕刻まで、藪やぶという藪、林という林、墓地から田圃たんぼから、町家の裏、軒の下、下水の中まで探し廻りましたが、狸はおろか狐も貉むじなも飛出しはしません。見かけたのは野良犬とドブ鼠ねずみがせいぜい、野次馬がゾロゾロついて歩いて、江戸っ子特有しんらつの辛辣な皮肉を浴びせるので、子分達は顔を赤くするような有様です。

陽が暮れて引揚げる時、利助の子分に一分ぶずつはずんだので、その方の悪口あつこうは封じましたが、世間の噂うわさはまことにさんざん。

「見や、銭形とか何とか言つたつて、あの態ていは何だ。石原の親分が病気でなきやア、あんな馬鹿なことを黙つて見ちゃいぬえ」

「全くだよ、狸が泥棒したつて話は、開闢かいびやく以来だ。猫に小判ならわかるが、狸に小判しやれじゃ洒落にもならぬえ。神田からわざわざ本所まで恥をかきに来たようなものさ」

いやもう滅茶滅茶です。

平次はしかし驚く様子もなく、一向平気な顔をし

て、予期した幕切れを待つておりました。

それから三日目、とうとうその日が来ました。

「親分、お品さんが見えましたよ」

取次ぐガラツ八をかき退のけるように、平次は待つていましたと言わぬばかりに飛出しました。

「お品さん、挨拶は抜きだ、あれはどうなった？」

「親分、とうとう出かけましたよ」

「そいつはしめたッ」

「親分に言い付かつた通り、押上おしあげの笛辰ふえたつの家を三日見張つていると、今日昼頃どこかの小僧が使いに来ました」

「フムフム」

「すると笛辰は夕方からブラリと出掛けたんです。よつぽど後をつ、けようと思いましたが、万ざと一ざと覚ざとれると藪蛇やぶひびだと思つて、とりあえず駕籠かごでここまで駆け付けました」

駕籠で来たくせに、あまりの緊張にお品は息を切つております。

「それで何もかも片付くだろう。平次の狸狩りに、見る人が見れば理窟りくつがあるつてわけさね、お品

さん」

「有難うございます。この上はどうか、お出かけ下すつて、手配をお願いします」

「いや、本所は石原の利助親分の縄張内だ、大急ぎで家へ帰つて、どこまでもお品さんが思い付いた事にして、原庭の大法寺へあの無住になつて荒寺の経蔵きやうぞうに手を入れさせるがいい、狸の巢はそこだ」

「……………」

「狸は弱いから、手先が二人も行けばたくさんだが、金貸し後家のお紺の家には凄すこいのが居るぜ。そこへは利助兄哥と、自分の者十人ぐらいで、すっかり用意をして踏込むがいい、こつちには手強いのが要る」

「親分は」

「俺は行くまでもないだろう、狸はもう罠わなに落ちてゐるんだ」

「でも」

お品はひどく心許ない様子でしたが平次に追い立てられて、石原の家へ駕籠で帰りました。

七

その夜の捕物は、平次の狸狩りにもまして本所の人達を驚かしました。

大法寺の経蔵に向つた二人の手先は、何の造作もなく、その中で馬鹿囃子をやってゐる、押上の笛辰と、その弟子で太鼓の上手と言われた、三吉さんきちを縛つて来ました。

同時に金貸し後家のお紺の家に向つた一隊は、そんな手軽なわけに行きませんでした、お紺を始め、その手代の嘉七かぢち、下女のお松を、どうやら、こうやら大骨折で縛り上げました。後で聞くと、手代の嘉七は武家上がりだそうで、腕うでがなかなか確しつりしていたので、利助の子分に二三人怪我人を拵こしらえましたが、幸いそれも大したことでなくて済みました。

本所を荒し廻つた大泥棒、——井筒屋の主人まで殺した曲者くまものは、言うまでもなくお紺とその手代の嘉七で、狸囃子は、世人せじんを惑わして、嘉七お紺の仕事

を助ける、笛辰と三吉の仕事だったのです。その後、与力笹野新三郎の調べに對して、嘉七は、

「へエ、誠に恐れ入りました。狸囃子を使ったのは、本所の七不思議をもじつたに相違ありませんが、実は貸本の『絵本太閤記』から思い付いたことで、日吉丸が、蜂須賀小六のところから、刀を盗み出すのに、三晩も続けて笠を雨落あま落ちに置き、小六の心を疲らせて、暁方ウトウトとしたところへ入って首尾よく取つたという術を用いたのでございます。雨落の笠代りに狸囃子を使ったまででございませう、もう一つ、狸囃子を聞かせたわけは、あの囃子の音に合せて、鋸を引くと、目の覚めているものでも、ちよつと気が付かないからでございませう」

と言つております。

この手柄を一人占めにして、石原の利助はどんなに面目をほどこしたかわかりません。近頃は利助に愛想を尽かしていた笹野新三郎も、口を極めてその頭あたまのよさを褒めました。

が、利助にしては、これほど見当の違つたことはありません。自分が何にも知らないうちに、大手柄

をしていたので、まるで夢のような心持です。

娘のお品を責めてみると、これはもう、言いたくて待ち構えていたところですから、何もかも平次の指金だつたことを一毫の隠すところなく言つてしましました。

薄々平次の息が掛つていゝとは思いましたが、その判断然わかつてしまうと、利助もジツとしてはいられません。手土産を用意して、神田まで一と走り。「平次兄哥、面目次第もない。何もかもお品から聞いたが、狸囃子の曲者を挙げさせた指金は、兄哥がやつてくれたんだつてネ」

日頃面白くない仲だけに、利助も我慢の角を折つて、畳に手を突きたい心持になります。

「兄哥、冗談じゃない、俺は何を知るものか、狸狩りをやつて物笑いの種を拵えただけさ。曲者の巢を突き止めたのはやはりお品さんに相違はないよ」

平次はなかなか真実の事を言おうとしません。

「まあいい、せつかくそう言つてくれるなら、強つて聞くまい。俺の心の中だけで、兄哥の親切を忘れ

なきやア——」

利助はこんな事を言つて、後は、お静の手料理で酒になりました。

*

「親分、あつしには臍ふに落ちない事だらけだ、利助親分に手柄をさせた心持はまあ判るが、どうしてあの曲者がお紺の家に居ると解つたんです。後学のためには教えておくんなさい」

とガラツ八は、利助の帰つて行く姿を見送りながら、平次に向いました。

「何でもないよ、六軒の雨戸を調べると、あとの五軒は、いかにも狸囃子に合せて、半刻も一刻もかかつて引き切つたように、鋸目が細かくなっているが、お紺の家の雨戸だけは、鋸目が荒くて、一気に引つ切つたことが判つたんだ」

「なるほど」

「五軒も六軒も荒らした曲者が、物持で通つたお紺の家へ入らないのはおかしいと思われるから、自分

の家へも入つたように、嘉七とお紺が細工をしたんだよ」

平次の観察は精緻せいじを極めます。

「ところで、大法寺の経蔵でやつた馬鹿囃子が、どうしてあんなに近くなつたり、遠くなつたり、東に聞えたり、西に聞えたりしたでしょう」

とガラツ八。

「尤もつともな疑いだが、太鼓は風呂敷を被せると音が鈍くなつて遠くの方で叩くように聞えるし、笛は上手になると、強くも弱くも自由に吹けるだろう」

「なるほどね」

「それから、あの経蔵には、入口が一つと、窓が二つある、その一つ一つを開けたり閉めたりして囃はやすと、音は酒井様のお邸やしきに響いたり、佐竹様の木立に響いたり、どうかすると、大川の方へ抜けたり、いろいろの方角に聞えるんだ。今度一つ試してみるがいい」

「へエ——そんな事もありますかねえ」

「まだ判らない事があるかい」

「あの日、昼一度廻つたのに、夜もう一度六軒の家

を廻つたのは？」

「あれは大失策おおしくじりさ、昼は鋸目にばかり気を取られたので、夜もう一度狸囃子をやった場所を探しに行つたんだが、暗くて何にも判らなかつたんだ」

「狸狩りは？」

「そこで、翌る日狸狩りということにして、土蔵か、穴蔵かともかく、どの方角へも自由に囃子の音を響かせるにいい場所を探したんだ。お蔭で銭形の平次は間抜けになつて、石原利助が器量を上げたのよ」

「つまらない事になつたものですね」

「利助兄哥も、これで引込みが付き、俺もお品さんへの義理が済んだというわけさ」

平次はそう言つて豊かにガラツ八を顧みました。頭の鈍いガラツ八にも、何となく失策しくじり平次の尊さがわかつたような気がしました。

底本：「銭形平次捕物控（六）結納の行方」嶋中文庫、嶋中書店

22004（平成 16）年 10 月 20 日第 1 刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話」中央公論社

1939（昭和 14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1932（昭和 7）年 5 月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2018 年 2 月 25 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。